

## 庭野平和財団助成プロジェクト 最終報告書

提出日：2016年5月13日（金）

組織名	福島ブックレット委員会
事業名	福島原発災害の教訓を世界に伝えるブックレットの普及活動
コード番号	15-NPF-006
活動の目的	<p>2015年3月に行われた第3回国連世界防災会議に向けて「福島10の教訓：原発災害から人びとを守るために」の5ヶ国語での刊行は、福島ブックレット委員会のミッション遂行のスタートに過ぎず、本を作ったから即リスク軽減に繋がるとは考えていない。本当の意味で原発立地国の人々のリスク軽減を図るには、ブックレットの内容を分かり易く現地語で伝える翻訳業務や、コンテンツをどう理解し、リスク軽減の施策に繋げていくかというコンサルテーションが必要である。</p> <p>この点を鑑み、福島ブックレット刊行委員会は2015年4月1日に福島ブックレット委員会と名を変え、以下の活動に注力して取り組む事を決めた：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①特に原発立地国の使用言語へのブックレットの翻訳・普及活動及び内容理解の為のワークショップの開催</li> <li>②原発立地国のコミュニティとの繋がり強化</li> <li>③原発立地国における原発事故対応計画に対するコンサルテーション</li> <li>④原発反対派、賛成派問わず、「リスク管理」の視点から必要な対策の議論を促す</li> </ul> <p>庭野平和財団には特に上記の①及び②に関しての助成を申請した次第である。</p>
活動の内容と方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2015年3月の福島グローバルシンポジウム及び第3回国連世界防災会議での積極的な拡散・広報により、多言語への翻訳をパートナー団体と協働して行う。</li> <li>● 福島ブックレット委員会として、それぞれの言語への翻訳をある一定水準のクオリティで行う為にも、翻訳に関わるガイドラインを作成し、翻訳を実際にやってもらう団体とは、権利関係を明確にした契約書を交わし、作業全体を管理する。</li> <li>● ブックレットの内容理解を深める為のワークショップやイベントを海外にて行う。</li> </ul>
活動の実施	本事業において達成した活動は以下の通り：

経過	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 福島ブックレットの翻訳ガイドラインを整備し、翻訳進行中も含めると今までに計 14 か国語（日本語、英語、韓国語、中国語、フランス語、英語、スペイン語、アラビア語、トルコ語、ヒンディー語、タミル語、マラティー語、アルメニア語、ベンガル語）で刊行の運びとなっている。</li> <li>● 本事業で直接的に支出したのは以下の翻訳である： <ul style="list-style-type: none"> <li>■ スペイン語：刊行済</li> <li>■ ヒンディー語（翻訳代の半分、残りの半分は福島ブックレット委員会の自己財源で対応）：2016 年 6 月刊行予定</li> <li>■ タミル語（翻訳代の半分、残りの半分は福島ブックレット委員会の自己財源で対応）：2016 年 8 月刊行予定</li> </ul> </li> <li>● 本事業で直接的に支出した普及活動としては以下を行った： <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 環境災害フォーラム（Environmental Emergencies Forum）：2015 年 6 月 「2015 Environmental Emergencies Forum」（オスロ）にて福島ブックレットのプレゼンテーションを行った。これは環境面の緊急事態への対処について議論する国際フォーラムで国連環境計画（UNEP）と国連人道問題調整事務所（OCHA）が主催。</li> <li>■ 2015 年 10 月 22 日、メキシコ市の大学文化センター（CUC）において、スペイン語版のおひろめシンポジウムを開催した。シンポジウム後には、メキシコ国立自治大学のゼミにて、福島の現状や広島・長崎の核被害について学生たちと議論する機会を作り、質疑応答が活発に行われた。また、10 月 24～25 日にはメキシコのコズメル島へのピースボート入港に合わせて関連行事を開催した。一連の行事は、現地の新聞等で広く報道された。</li> <li>■ 2016 年 1 月 12 日から 13 日まで『大規模工業地帯への自然災害の影響に関するシンポジウム』に本委員会メンバーである小美野が出席。このシンポジウムは国内外の専門家による研究成果を発表し、今後の南海トラフや首都直下地震などの大規模災害から工業地帯をどう守るのか、また工業地帯の有事によって影響を被る周辺住民をどのように守るのが目的で、大阪大学・京都大学主導のもと、各大学・研究機関・行政・企業・NGO 等が集まり、様々な視点から発表及び討議が行われた。本委員会を代表して行った発表では、仙台防災枠組の精神も取り込みつつ、事前に住民にリスクを開示する重要性、またそれが何故リスクを減らす事につながるのかに焦点を当て、共有した。</li> <li>■ 「福島 10 の教訓」のヒンディー語版をはじめとしたインドの諸</li> </ul> </li> </ul>
----	--

	<p>言語への翻訳・普及を中心的に担当しているインドのクマール・スンドラム氏のグループと、本委員会のメンバーであるふくしま地球市民発信所の協働により、インドで福島教訓を伝えるセミナーを開催した。福島からのスピーカーとして、二本松市東和で有機農業を軸に首都圏の消費者との交流事業を展開する若き起業家菅野瑞穂氏と、旧警戒区域の浪江町に留まり、放射能汚染され殺処分命令を受けた牛 330 頭の世話を続ける希望の農場ふくしまの吉澤正己氏が参加。2016 年 3 月 20 日にデリー、21・22 日にムンバイ、23 日にチェンナイの 3 都市で合計 5 回のセミナーを開催した。各会場でブックレット「福島 10 の教訓」の英語版の紹介、およびヒンディー語版、タミル語版、マラティー語版の制作が進行中であることを紹介した。</p>
<p>活動の成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 14 言語に翻訳されたということで、福島や日本の原発災害に関心を持つ人々が、体験・教訓を共有する重要性やそれを世界的に共有する意義に気が付いた。また、日本の私たちが、福島教訓の共有をさらに広く深く、かつ継続的に行っていくことが、「持続可能な開発」のための責務であると気が付いた。</li> <li>● 「2015 Environmental Emergencies Forum」(オスロ) がきっかけとなり、リスク開示に関する国際基準の設置を検討するワーキング・グループを設立。次回(2017 年)開催時にその成果を報告する事になっている。</li> <li>● インド 3 都市で学生、NGO 関係者、ジャーナリスト、農民など、合計約 280 人がセミナーに参加し、原発事故後何が起き、現在どのような困難が続いているのか、福島からの農業者らの生の声を聴いた。それにより、ひとたび原発事故が起きるとどのような状況になるのか、具体的に伝え、話し合うことができた。</li> <li>● インドでも新たな原発増設の動きが加速している中、インドでも福島のような原発事故は起こりうること、そのような事態を避けるためにインドの人々自身が今後どうするか考えていかなければならないことを強く印象づけることができた。</li> <li>● インド現地の新聞各紙にも記事が掲載されるなど大きな反響があった。</li> <li>● スンドラム氏をはじめ、インド側で我々のチームを受け入れ、セミナーの準備をしてくれたインド各国語版ブックレット制作メンバーの人々との繋がりも深めることができた。</li> <li>● 5 月に開催する報告会(東京、福島)により、吉沢氏、菅野氏らがイ</li> </ul>

	<p>インド訪問で感じたこと、学んだことなどを日本の人々にもフィードバックする事になっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● メキシコで発表したスペイン語版がラ米諸国へ、そしてインドの諸言語などが、今後原発の建設、運用の拡大が予測される開発途上国において、福島を教訓を普及する足がかりを作ることができた。</li> <li>● 翻訳のみならず現地でのイベント開催を組み合わせることにより、地元住民や学生、住民運動指導者たちの意識啓発に成功した。</li> <li>● 2016年3月12日～4月3日にタヒチや東京、福島で行われた太平洋ピースフォーラム、3月22日～24日に福島で開催されたノーニュークス・アジアフォーラム、3月23日～28日に東京、福島で開催された核と被ばくをなくす世界社会フォーラム2016の海外ゲストなどへ各国語版のブックレットを配布したことにより、シンポジウムでの議論が深まった。</li> </ul>
<p>今後の課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 残念ながらインドのイベントには制作中のブックレットのヒンディー語版、タミル語版、マラティー語版は間に合わなかった。完成後、これらのブックレットを効果的に使っていくための方策をインドのメンバーとともに考えていく必要がある。</li> <li>● 今回の訪問直前、グジャラート州の原発で重水漏れ事故があり、政府からの情報公開がまったく無い中、放射能漏れや作業員の被ばくが心配されていた。現地で活動するNGO関係者が放射線測定器をほとんど持っていないため、なんらかの形で測定機材、技術などの協力ができればと考えている。</li> <li>● 今後もインドとの交流は継続していきたいが、資金的にはまだ目途がたっていない。</li> <li>● 今回の活動結果を足がかりとして、原発立地国における原発事故対応計画に対するコンサルテーションや原発反対派、賛成派問わず「リスク管理」の視点から必要な対策の議論を促すなどを加味した現地での活動をもう少し深める必要がある。</li> <li>● 2016年5月22日にトルコにて翻訳団体と共に記者会見を行い、トルコの原発政策において福島の教訓を学び、将来のリスクを出来るだけ減らす必要性を訴える。</li> <li>● 備考：ブックレットの普及数について 日本語：7996冊、英語：4178冊、中国語：649冊、韓国語：875冊、仏語：479冊、スペイン語：730冊</li> <li>● 「ふくしまから世界へ」 <a href="http://fukushimalessons.jp/">http://fukushimalessons.jp/</a> ウェブサイト稼働状況（2016年5月11日現在）</li> </ul>

【ZIP ダウンロード数】

	JPN site	ENG site	Total
JPN	73	5	78
ENG	22	58	80
CHN	9	12	21
KOR	3	7	10
FRA	2	14	16
ESP	4	4	8
ARM	1	0	1
TUR	1	0	1
BEN	0	0	0

=====

【PDF 閲覧数】

	JPN site	ENG site	Total
JPN	232	17	249
ENG	43	89	132
CHN	21	29	50
KOR	9	19	28
FRA	8	75	83
ESP	12	22	34
ARM	9	6	15
TUR	9	3	12
BEN	7	0	7

## 会計報告書

被助成者：福島ブックレット委員会（共同代表 大橋正明）



（単位：円）

### ＜収入の部＞

項目	予算	決算	備考
1. 助成金	1,200,000	1,200,000	
2. 預金利息	0	0	
合計	1,200,000	1,200,000	

### ＜支出の部＞

費目	予算	決算	内訳・備考	
1. 人件費	協力者謝金	600,000	456,280	スペイン語、ヒンディー語、タミル語 翻訳・通訳・組版作成
	補助者謝金	0	0	
2. 旅費	国内	0	0	
	海外	600,000	486,125	ノルウェー、ドイツ、メキシコ、インド
3. 機械・器具 備品等	0	0		
4. 研究委託費	0	0		
5. 会議費	0	21,658	東京、メキシコ、インド	
6. 資料費	0	0		
7. 印刷・複写費	0	227,140	スペイン語版	
8. 交通・通信費	0	0		
9. 消耗品費	0	0		
10. 雑費	0	9,672	振込・送金手数料	
合計	1,200,000	1,200,875	875円は自己負担	

平成27年4月1日～平成28年3月31日